

(枕崎市立神二本木)

位置と環境

二本木遺跡は、枕崎市の西部標高20m前後の微高地にあたり、南側にゆるやかに傾斜している。北に風見岳、西に宗前岳、南に東シナ海を望み、現況は畑地として利用されている。

調査の経緯

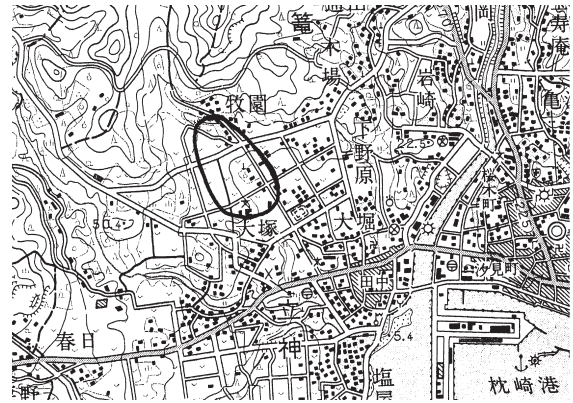
立神中学校の建設に伴い、平成5年3月に予定地の確認調査を実施した。確認調査は、枕崎市教育委員会が調査主体となり、鹿児島県教育委員会の協力を得て実施した。

確認調査の結果、調査対象面積31,000㎡のうち約12,000㎡が、旧石器時代から古墳時代の遺跡であることが判明し、校舎の位置等で設計変更等を行った後、保存が不可能な遺跡部分の約1,200㎡について、平成5年度に本発掘調査を行うこととなった。

確認調査は2×4mのトレンチを基本として、40mグリットに沿って22本のトレンチを設定し、遺跡の範囲確認を行った。このうち、確認された遺物包含層は古墳時代～縄文時代・縄文時代早期・旧石器時代で、AT下の土坑・礫群についても遺構の可能性がある。確認調査のトレンチでの検出で、本調査の対象地区外であり、それ以上は調査していない。

遺構と遺物

本調査の結果、縄文時代早期の住居跡が3軒、縄文時代後期とした住居跡が1軒、縄文時代早期の集石が1基検出された(第2図)。AT下の土坑については、阿多溶結凝灰岩の風化粘土層上に検出され、幅75cm×深さ10cmの大きさの土坑で、土坑内に石が集積している。1号住居跡は、プランが不明確で、長軸約4.5m×短軸約3mで、南東部に張り出して幅4mになり、テラスが巡る。2号住居跡は、縄文時代早期該当層で検出したが、ほかの住居跡と埋土が違ふ。規模は約4m×4mで、住居跡内にはピットが1つあるだけで、掘り込みの外周に11のピットが巡る。炭化物の年代から縄文時代後期とした。3号住居跡は、ほぼ3.6m×3.5mの規模の隅丸の5角形状で、北西側のコーナーが明確でない。中央掘り



第1図 二本木遺跡の位置

となっている。4号住居跡も3.8×3.2mの隅丸方形で、中央部に1.4×0.9mの掘り込みがあり、2段掘りとなっている。3号と4号はいずれもアカホヤ層の直下に、埋土が青灰色の砂礫層であり、一部でラミナ堆積や礫が大量に流れ込んでいた。プランも一定方向で乱れており、洪水により床面が洗い流されたものと判断できる。アカホヤ層直下の遺構面で大小の礫が不安定に集積しており、これらの状況と併せて、河川の氾濫を予想した。成尾英仁は鬼界カルデラ爆発時の津波等の災害を想定している。遺物は古墳時代の土器、縄文時代早期の石坂式土器・塞ノ神式土器・平椀式土器・手向山式土器が出土し、石器は縄文時代早期に石鏃・スクレイパー・石皿等と旧石器時代のチャートの剥片が出土した。

特徴

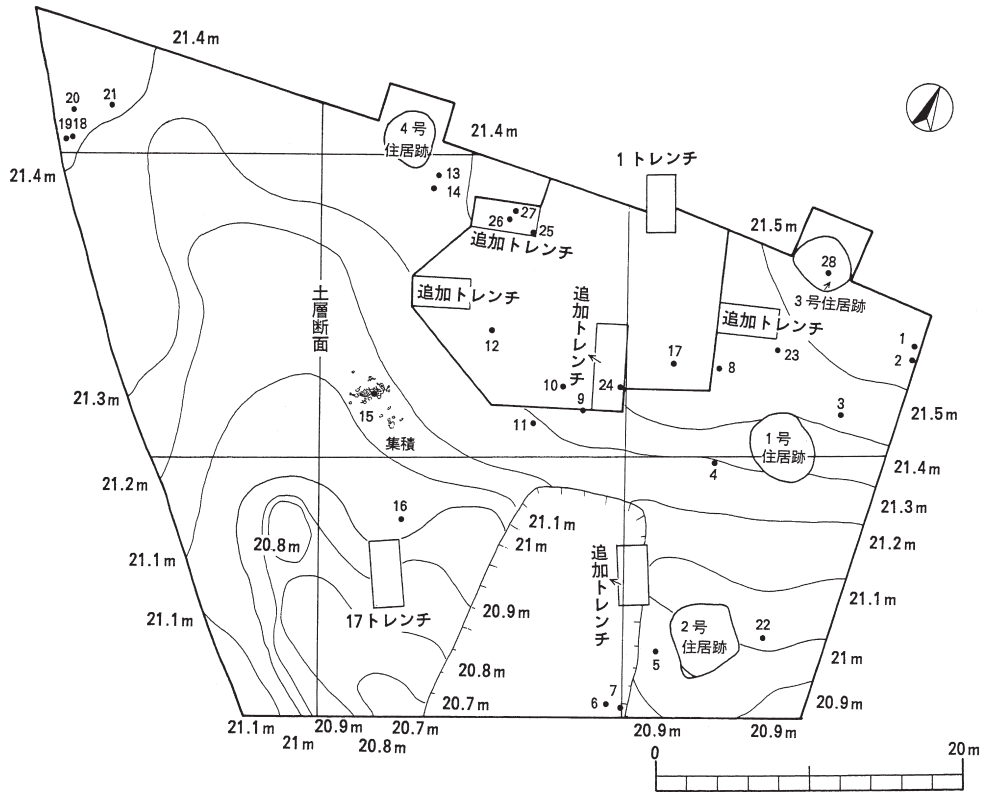
AT下の礫群については、南種子町横峯C遺跡、中種子町立切遺跡などから、同時期の遺構の可能性が十分にある。AT層の薄い南薩地域の調査がより古い旧石器時代の実態解明のために、調査の際にそこまで射程に入れる必要がある。これらの部分は現在の運動場の下に保存されている。縄文時代早期後半の住居跡の検出例は少なく、縄文時代の住居跡の変遷等を考えるうえで貴重な資料である。

資料の所在

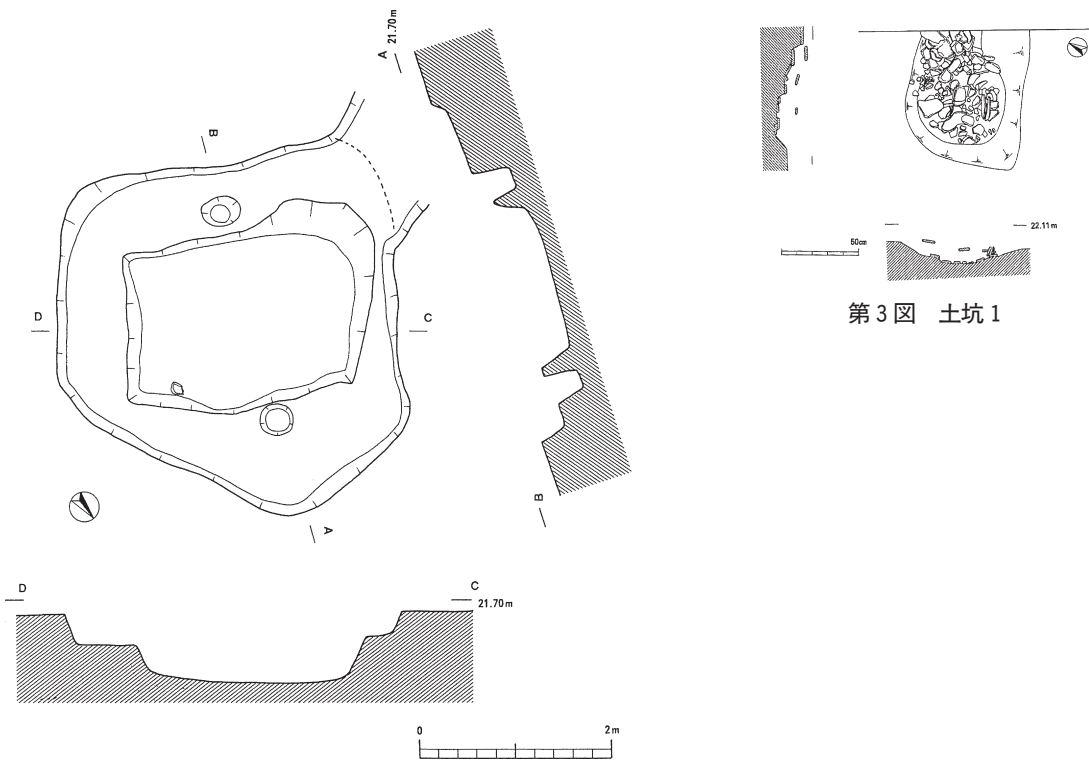
出土遺物は、枕崎市図書館に、保管活用されている。

参考文献

枕崎市教育委員会1995「二本木遺跡」『枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書』9 (堂込秀人)



第2図 遺構配置図



第3図 土坑1

第4図 3号住居跡